

女子と二人きりで、校舎裏、とか。

男子高校生ならば少なからず興奮するシチュエーションだ
と思うし、俺もその例に漏れないわけだけれど。ばく、ば
く、と耳の後ろで爆発しそうに打っている鼓動は、それだけ
で高鳴っているのではない。

とん、と彼女の細い指がパッケージを叩いて、少しだけ頭
を出したフィルターを桃色の唇が挟んで摘まみ上げる。する
りと抜き出されたそれが反動でふんわり揺れるのを、俺はじ
つと——というに変態みたいだけれど、じつと、見つめてい
た。彼女は、今は使われていない焼却炉の上に座っていて、
俺はそれを見上げている。けれどもずっと、彼女の視線は、
俺に向かない。

陽が沈みかけて、もう薄紫の明かりしか残っていない世界
の中で、ぼつと橙色が灯る。百円ライターの安っぽいピンク
色が、彼女の白い肌に反射していた。化粧っ気の無い顔、二
つ縛りの地味な黒髪。けれど、透明に見える、澄んで静かな
無表情の下、着込んでいるのは校則通りの野暮ったいセーラ
ー服。

そんな、学校生活の中ではちっとも目立たないだろう彼女
が、非行の象徴みたいなものを啜えている光景が、俺には何
よりも刺激的に見えた。これが隣のクラスの時代遅れのギャ
ルだとか、そういう女子がやっているのなら、この一瞬の光

景に目を奪われるはずもなかったのだけれど。

すう、と薄く息が吸い込まれると同時に、ぼつと赤く火が
灯る。ふうー、と深く吸って、白い煙を一口吐き出したと思
うと、やつと、黒い真ん丸の瞳が俺の方に向けられた。ぼう
つと、二口、三口、と吸い込む間、静かに俺を見ていた彼女
は、うつすらと唇の端を緩める。

とん、と本当に軽い音だけを立てて、彼女は濡れた芝草の
上へと舞い降りた。飾り気のない白いスニーカーに踏まれた
地面が、ぴちよりと飛沫しぶきを立てるのが、どうにも幻想的に見
えるのはきつと欲目も欲目なのだろうけれど。とん、とコー
ンポタージュの缶の中に灰を落としてから、どうぞ、と小鳥
が鳴くみたいな細かい声か、静かな校舎裏に転がった。

あ、俺か、と思うに三秒間。そんな空白を待つてくれるよ
うな彼女ではなく、気付いた時にはフィルターは俺の唇に突
きつけられていた。ほっそりとした指の腹が急かすように唇
の上を撫でていって、慌ててフィルターを食んだ俺は勢いよ
く息を吸いこみすぎて、思いつきり噎むせてしまった。

ああ、あつい。あつくて、熱くて、ひりひり灼けて。

喉が痛んで、胸まで落ちて、ドキドキ脈打つ心臓を跳ねさ
せる。痛くて、いたくて、咳き込むたびに、俺の身体がじり

じりと。熱に蕩けて、涙ぐむ。

おいしいか、と問いかけてくる視線に向き合うだけで精一杯な俺に、彼女はどうにも満足そうに頷いた。そうだよ、と同意するようにも、まだまだ子供だね、と——いや彼女の方が後輩なのだけれど——言っているようにも思えて、俺はこの悪戯っ子みたいな笑顔が好きだった。彼女の顔に浮かぶ表情で嫌いなものなんて、ひとつもなかったけれど。

こほ、ともう一つ咳き込めば、俺の口から煙が零れる。

ああ、ああ、苦いのも、辛いのも、痛いのも、ちっとも好きにはなれないけれど。この、世界に殴りかかっている感じだとか。自分の身体に悪いことをしている、取り返しのつかないことをしている、って感じは、堪らなくって、悪酔いしてしまつて。ぼんやりした月明かりの下、どうだ、と精一杯悪ぶって胸を張った。それに、彼女が薄く笑う。

一口吸えば、俺への世間の信頼がなくなっていくように。

一口吸えば、俺の未来が崩れていくように。

一口吸えば、俺の寿命を殺してくれているみたいで。

一口吸えば、俺のざわついたこの心を、甘やかに蕩けさせてくれるみたいで。

この、毒が。俺は、きつと好きで、逃げ出せない。

いや。——これ、って何だろうか。煙草か、彼女か。ああ

でもきつと、どちらにしても、きつと同じだ。

とん、と細く白い指先が、またパッケージを柔く叩いた。

俺の啞えた煙草から、甘く紫煙が立ち上る。悪いことに、目が眩む。ちかちか、ちかちか、蛍の光を纏って輝く、彼女がそつと煙草を啞えて。

ずいっと身を寄せられるから、逃げられないままじつと固まる。数十センチの距離まで迫って、ちかい、と思う心臓が爆発しそうなところで、とん、と煙草越しの唇に柔い衝撃。

じり、と彼女の啞えた新品の煙草に、俺の煙草から火が移る。彼女の掌が作る影の中、熱が奪われて、白い紙が焼き焦げて、ぽつと蛍が移っていくのを、瞬きさえも忘れて見つめて。すう、つと離れていった彼女が、くるりと身とスカートを翻しながら焼却炉の上へと戻って寛ぐまで、俺はその場に立ち尽くす。

ふう、と吐き出す息が熱いのは。

煙に焼かれた肺か、喉か。それとも、彼女に呑まれた心か。ああ、確かに、首から額のてっぺんまで、赤くなっている気はするけれど。

じり、じり、と燻らせる間もない内に、俺の煙草が燃え尽きていく。灰が、一センチ、二センチ、と伸びては重力に負

けて地面に落ちそうになって、流石にやばい、と我に返って
コーヒーの缶に落とした。まだ残ってたのに、と思ったのは
どうに手遅れになった後で、あーあ、とぼやく元気もない俺
は、濡れた芝には寝っ転がれないから、立ったまま空を仰ぐ
のだ。

::

ぼうつとしながら煙を吸っては吐き出して、中空の月の中
の兎を探す。昔から何回見たって兎の餅つきには見えない
な、とは本当にどうでもいい話。と、カラリと音を立てて背
後のガラス窓が開いて、キャミソール姿の彼女が隣へと寄り
添ってくる。

ん、と強請るように出される右手は、俺のなけなしの一本
が差し出されるものと疑っていない。最近また値上がりした
んだけどなあ、とは思いながらも素直に一本手渡すと、リッ
プに濡れた唇がゆるりと弧を描いた。やめたんじやなかつ
たっけ、と言え、いっぽんだけ、といつもそう言う。

とん、とまた長いながい数十センチの間を置いた、けれど
も深いキスを交わせば。ふかふか幸せそうに煙を味わう彼女
は、俺よりずっと様になる立ち姿でベランダにもたれ掛かっ
た。おいしい、としつとりと染み入るような声。

いつも、いつも、こうして欲しがるものだから、俺はちっ
とも買う銘柄を変えられない。マンシヨンの下のコンビニ
で、すっかり顔を覚えられてしまったからか、番号も言わず
に差し出されるパッケージは見慣れたような、見飽きたよう
な。辛い風味に喉が焼かれて、重たいタールに肺が痛んで、
けれどもほんのちよっぴりと、チョコかココアか甘露の香
り。デザートみたいでしょ、という彼女の言葉が何となく分
かるようになってきてしまったのが、嬉しいような、悔しい
ような、どうにも言えない心地だけだ。

すう、と吸い込む心地良さに、もう、悪いこと、なんて気
持ちは混じらなくなってしまった。合法、嗜好、自己責任。
お好きなように、好きなだけ。

とは、やめられない自分を甘やかすような言い訳に過ぎな
いし、薄らと浮かぶ後悔も実のところは尽きないけれど。

吸った分の毒だけ、彼女と交わしたキスと。

吸った分の毒だけ、二人揃って早死にしては失う時間と。

どちらの方がより幸福をくれたのか、なんていうのは、ど
うせ。

月の光の届かない、地獄に落ちてから決まるのだ。